

中学校武道授業の学習経験に関する検討

— 保健体育科教員養成課程学生に対する回顧的調査から —

Study on the Learning Experience of Junior High School Martial Arts classes

— Retrospective Survey of the Health and Physical Education Teacher Training Course Students —

体育学部体育学科

平田 佳弘

HIRATA, Yoshihiro

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

岡山県立大学保健福祉学部

京林由季子

KYOBAYASHI, Yukiko

Department of Health and Welfare Science

Okayama Prefectural University

Abstract : The purpose of this study is to clarify how health and physical education teacher training course students perceive the learning outcomes of martial arts classes experienced in junior high school through a retrospective questionnaire survey. As a result, the survey subjects of this study gave positive answers about learning outcomes. In addition, differences were seen in some items of learning outcomes depending on the type of martial arts. It will be necessary to consider teacher training that captures the characteristics and fun of each type of martial arts, which is interpersonal martial arts.

Keywords : junior high school's Health and physical education, martial arts, learning outcomes, health and physical education teacher training course students

1. はじめに

日本の伝統文化の一つとして位置づけられる武道は、2008年に改訂された中学校学習指導要領（文部科学省、2008）により必修化となり、2012年度から中学校保健体育科において全面実施され10年が経過した。必修化された武道授業では、その学習を通じて技能の習得とともに我が国固有の伝統と文化の理解についての内容が示された。

2008年改訂の中学校学習指導要領（文部科学省、2008）では、武道の内容について第2章第7節保健体育の各分野の目標及び内容に以下のように示されている。

〔F 武道〕

（1）次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。

ア 柔道では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、投げたり抑えたりするなどの攻防を展開すること。

イ 剣道では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、打ったり受けたりするなどの攻防を展開すること。

ウ 相撲では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、押したり寄ったりするなどの攻防を展開すること。

（2）武道に積極的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁止技を用いないなど健康・安全に気を配ることができるようにする。

（3）武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。」

2017年には中学校学習指導要領（文部科学省、2017）が改訂され、我が国固有の伝統と文化への理解をより踏まえるとともに、「技能」の内容が、「基本となる技ができる」から「簡易な攻防を展開すること」に変更され、生徒一人一人に攻防する楽しさを味わわ

せることが強調されて示されることとなった。

2017年改訂の中学校学習指導要領（文部科学省，2017）では，武道の内容について第2章第7節保健体育の各学年の目標及び内容に以下のように示されている。

〔F 武道〕

武道について，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

- (1) 次の運動について，技ができる楽しさや喜びを味わい，武道の特性や成り立ち，伝統的な考え方，技の名称や行い方，その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに，基本動作や基本となる技を用いて簡易な攻防を展開すること。
 - ア 柔道では，相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を用いて，投げたり抑えたりするなどの簡易な攻防をすること。
 - イ 剣道では，相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を用いて，打ったり受けたりするなどの簡易な攻防をすること。
 - ウ 相撲では，相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を用いて，押したり寄ったりするなどの簡易な攻防をすること。
- (2) 攻防などの自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことを他者に伝えること。
- (3) 武道に積極的に取り組むとともに，相手を尊重し，伝統的な行動の仕方を守ろうとすること，分担した役割を果たそうとすること，一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとするなどや，禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ること。」

ところで，2012年の武道授業必修化以来，学習指導要領で示された内容の取り組みに向けて指導法や教材作成などの授業実践に関わる研修や実践，武道授業の実態に関する研究などが蓄積されてきた（全日本剣道連盟，2009；平田・京林，2016；日本武道館，2021；林・石川・生田，2023）。しかし，これらの多くは武道種目をどう教えるかという観点からのものや，教員の視点からの授業評価であるものが多い。これに対して，関ほか（2023）は，武道必修化以降の武道授業における学習成果を検証することを目的として，中学校の武道授業において，学んだ生徒が学習内容に関して身に付いたと感じたことを学習成果と捉え，必修化前と必修化後の学習成果と授業条件の変化について検討

している。具体的には，19歳から31歳までの対象者にWeb調査を実施し，学習成果については，男性の技能を除いて必須化後の方が高い学習成果を示すこと，授業条件については，必修化後の方が授業の雰囲気は明るく，指導方法の工夫がなされ，運動時間の確保が進む変化が見られること，指導の段階は基本的技能の習得が中心となること，性別による違いがあることなどを明らかにしている。

中学校学習指導要領で示された武道授業の目標と内容が，実際の授業形態や指導内容にどのように反映され，どのような学習成果が得られているのかを検証することは，今後の武道授業を考えていく上で重要である。その際，授業者側からの評価だけでなく，学んだ生徒自身が中学校での武道授業の経験をどのように捉えているのかを検証することは，今後の武道授業を考えていく上で多角的な示唆が得られよう。

そこで本研究では，武道必修化以降に中学校で武道授業を経験し，体育教員として武道授業を指導する立場になる保健体育科教員養成課程学生を対象に，自身が経験した武道授業の授業条件や学習成果をどのように捉えているか，回顧法による質問紙調査により明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象

I 大学教員養成課程（保健体育）の2023年度「保健体育科指導法Ⅱ」受講200名を対象とした。

2.2 調査方法

調査方法は，無記名のWebアンケートとした。調査にあたっては，アンケートの目的および回答結果が個人の評価に関係しないことを文章と口頭にて説明し，調査に同意すると回答した学生にアンケートへの回答を依頼した。その結果，回答が得られた138名（回収率69%）を分析対象とした。全員，武道授業必修化以降に中学生であった年代にあたる。

2.3 調査内容

調査内容は，①回答者属性，②授業条件に関する調査項目：10項目，③学習成果に関する調査項目：関ほか（2023）の調査項目5 カテゴリー-17項目（Table 1），④体育教員として取り組みたいこと（自由記述）の4領域より構成した。③学習成果に関する調査項目の回答は4件法（思う4点～思わない1

Table 1 学習成果に関する調査項目

カテゴリー	項目	内容
技能	基本動作や基本となる技の習得	① 武道の授業では、相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を習得することができた。
	攻防の展開	② 武道の授業では、「打つ・受ける（剣道）」「投げる・抑える（柔道）」など、相手との攻防を展開することができた。
態度	協力	③ 武道の授業では、仲間の学習を援助しようとすることができた。
	責任	④ 武道の授業では、授業において分担した役割を、積極的に取り組もうとすることができた。
	健康・安全	⑤ 武道の授業では、体調の変化などに気を配ったり、危険な動作や禁じ技を用いたりしないなど安全に留意することができた。
	愛好的態度	⑥ 武道の授業では、授業に積極的に取り組もうとすることができた。
	伝統的な行動の仕方	⑦ 武道の授業では、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方（礼儀作法など）を守ることに取り組もうとすることができた。
知識	武道の特性	⑧ 武道の授業では、武道は、技を身に付けたり、身に付けた技で攻防する楽しさや喜びを味わうことができる運動種目であることを理解することができた。
	武道の成り立ち	⑨ 武道の授業では、武道は、武技、武術などから派生した我が国固有の文化として、世界各地に普及していることを理解することができた。
	技の名称や行い方	⑩ 武道の授業では、技には名称があり、身に付けるための技術的なポイントがあることを理解することができた。
	伝統的な考え方	⑪ 武道の授業では、単に試合の勝敗を目指すだけでなく、技の習得などを通して人間としての望ましい自己形成を重視するという考え方があることを理解することができた。
	関連して高まる体力	⑫ 武道の授業では、各種目（柔道、剣道）において、高まる体力要素があることを理解することができた。
	試合の行い方	⑬ 武道の授業では、簡易な試合におけるルール、審判や運営の仕方があることを理解することができた。
思考・判断	体の動かし方や運動の行い方に関する思考・判断	⑭ 武道の授業では、技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見分けることができた。
	運動実践につながる態度に関する思考・判断	⑮ 武道の授業では、仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けることができた。
体育の方向目標		⑯ 武道の授業は楽しかったですか。 ⑰ 武道の授業を通じて、武道の特性を味わうことができましたか。 〔武道の特性：武道は、技を身に付けたり、身に付けた技を用いて相手と攻防する楽しさや喜びを味わうことのできる運動であること。〕

（出典）関伸夫・川田裕次郎・中村充（2023）中学校武道授業の必修化前後における学習成果の変化. 体育学研究, 68, p.413. 但し、項目番号は筆者が加え、表の体裁を整えている。

点)とし、カテゴリー平均得点と項目平均得点を算出した。統計的分析にはSPSS28を用いた。④体育教員として取り組みたいこと（自由記述）の回答の分析には、AIテキストマイニング（ユーザーカル社）を用いた。

3. 結果

3.1 回答者属性

回答者の学年、性別はTable 2に示す通りであり、

学年は2年生が84.1%と最も多く、性別は男性68.8%、女性29.7%、その他1.5%であった。

Table 2 回答者属性

	性別			合計
	男性	女性	その他	
学年 2年生	80	34	2	116
3年生	14	7	0	21
4年生	1	0	0	1
合計	95	41	2	138

中学校で受講した武道種目は、柔道63.0% (87名)、剣道25.4% (35名)、その他11.6% (16名)であり、武道経験は、中学校で初めて経験したものが78.3% (108名)であった。

3.2 授業条件

武道授業の授業条件について、回答者が学んだ生徒の立場から感じた回答結果をFig.1～Fig.8に示す。

回答者が経験した武道授業の実施形態は、「男女別習」が70.3%，指導者は「体育教員1名による授業形態」が81.9%と多くを占めていた。施設・用具の状況は「最低限」が47.1%，「十分」が44.9%であった。武道授業で体を動かしている割合は「5割以上7割未

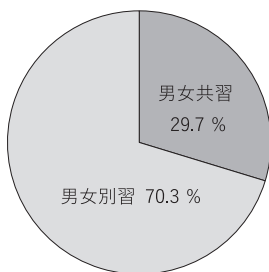


Fig. 1 武道授業の実施形態

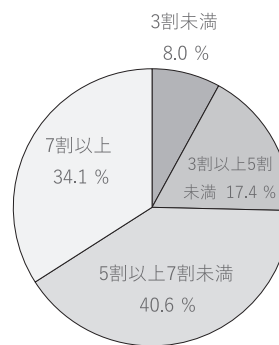


Fig. 4 武道授業で体を動かしている割合

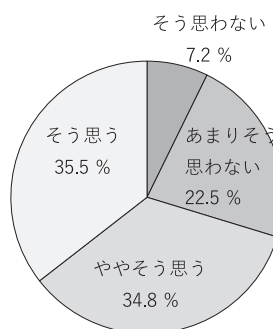


Fig. 5 武道授業の雰囲気は明るかったか

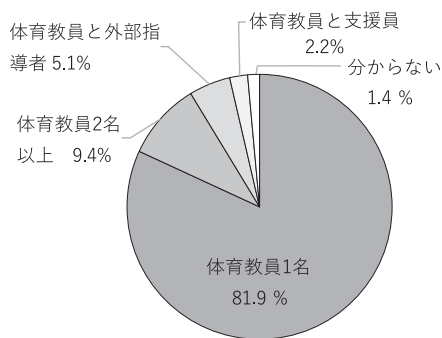


Fig. 2 武道授業の指導者数

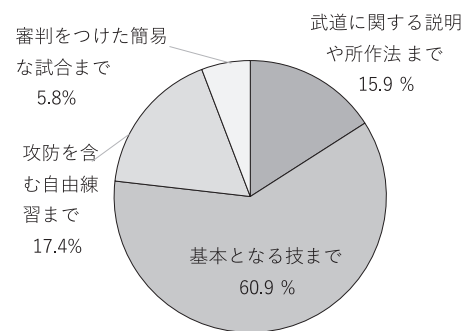


Fig. 6 武道授業の指導の段階

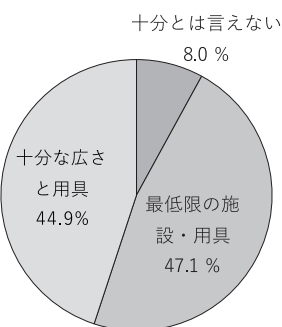


Fig. 3 武道授業の施設・用具の状況

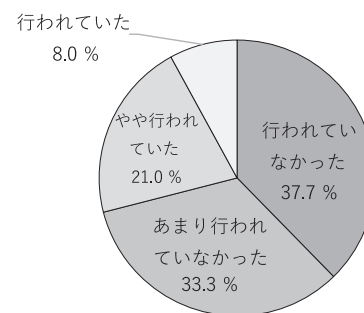


Fig. 7 ゲーム的要素を取り入れた学習活動

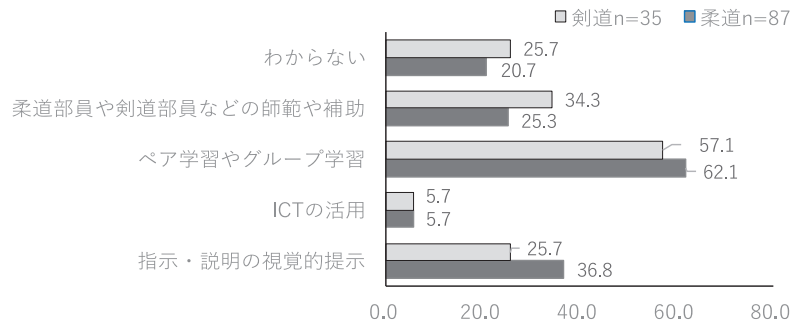


Fig. 8 武道授業で行われていた工夫

満」が40.6%と最も多く、武道授業の雰囲気は明るかったかについては「そう思う」が35.5%と最も多かった。武道授業の指導の段階は「基本となる技まで」が60.9%であり、ゲーム的要素を取り入れた学習活動は「行われていなかった」が37.7%と最も多かった。武道授業で行われていた工夫については「ペア学習やグループ学習」とする回答が最も多かった。

男性群（95名）と女性群（41名）、中学校以前の武道の経験有り群（25名）と経験無し群（108名）、武道種目の柔道授業群（87名）と剣道授業群（35名）のそれぞれについて、 χ^2 検定を行った結果、授業条件のそれぞれの回答割合に有意差は認められなかった。

3.3 学習成果

学習成果のカテゴリーの平均得点をTable 3に示す。

カテゴリーの平均得点は、全体では「態度」が3.3と最も高く、「技能」が2.9と最も低かった。男性群と女性群、中学校以前の武道の経験有り群と経験無し群、武道種目の柔道授業群と剣道授業群のそれぞれについてt検定を行った結果、カテゴリーの平均得点に有意差は見られなかった。

項目別の平均得点（Table 4）については、全体では「態度」カテゴリーの健康・安全“⑤武道の授業では、体調の変化などに気を配ったり、危険な動作や禁止技を用いたりしないなど安全に留意することができた”が3.44と最も高く、「知識」カテゴリーの試合の行い方“⑬武道の授業では、簡易な試合におけるルール、審判や運営の仕方があることを理解することができた”が2.80と最も低く、「技能」カテゴリーの攻防の展開“②武道の授業では、「打つ・受ける（剣道）」「投げる・抑える（柔道）」など、相手との攻防を展開することができた”も2.83と低かった。男性群（95名）と女性群（41名）、武道の経験有り群と経験無し

群については、t検定の結果、項目別の平均得点に有意差は見られなかった。武道種目の柔道授業群と剣道授業群では、「態度」カテゴリーの愛好的態度“⑥武道の授業では、授業に積極的に取り組もうとすることができた”、「知識」カテゴリーの武道の特性“⑧武道の授業では、武道は、技を身に付けたり、身に付けた技で攻防する楽しさや喜びを味わうことができる運動種目であることを理解することができた”、技の名称や行い方“⑩武道の授業では、技には名称があり、身に付けるための技術的なポイントがあることを理解することができた”の3項目について、武道種目の柔道授業群が剣道授業群よりも平均得点が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

3.4 体育教員として取り組みたいこと

質問項目「実習生あるいは体育教員として武道の授業を担当する場合、指導の内容や方法など、取り組んでみたいこと」については、85名から自由記述の回答があった。自由記述の回答をAIテキストマイニングに入力し出現単語を抽出した。

出現頻度の高い名詞の上位10語をTable 5に示す。質問項目に関連する「授業」「指導」「武道」の上位3語を除くと、「技」「試合」「生徒」「柔道」「怪我」「安全」「基本」の順に出現頻度が高かった。

「技」については、文中にこの単語を使用している記述以外にも、「技」の名前などの関連した記述も多数見られた。

- ・技ができると面白いので、できるだけ技を教えたい
- ・柔道の技などは言葉だけだと伝わりづらいため実際に目で見せてから技などを行わせ、練習をさせていきたい
- ・受身などのお手本をして指導をしたい
- ・大腰などの比較的簡単な投げ技の指導

「試合」についても、直接記述しているもののほか、間接的に言及している記述が見られた。

- ・簡易的な試合形式でやってみたい
- ・試合が楽しかったのでできるだけ試合を多くできるようにしたい
- ・基本とした技の形を習得させ、ゲームまでもっていけるような授業展開をしたい

「生徒」については、楽しさと関連させて直接記述

しているもののほか、楽しさに間接的に言及している記述も見られた。

- ・生徒が楽しめるような授業
- ・基本的な技術習得に加え、ゲーム形式でどんどん武道の楽しさを体験させたい
- ・楽しさのある活動をする中で、教えるべき内容を含むことを考えていきたい

「怪我」「安全」については、生徒の安全を意識した

Table 3 学習成果のカテゴリー平均得点

	全体	性別		武道経験		武道種目	
	n=138	男性 n=95	女性 n=41	経験有 n=25	経験無 n=108	柔道 n=87	剣道 n=35
技能	2.9	2.9	3.0	3.0	2.8	3.0	2.8
態度	3.3	3.3	3.4	3.4	3.1	3.4	3.1
知識	3.1	3.1	3.1	3.2	2.9	3.2	2.9
思考・判断	3.1	3.1	3.1	3.2	2.9	3.2	2.9
方向目標	3.1	3.1	3.2	3.2	2.9	3.2	2.9

Table 4 学習成果の項目別平均得点

カテゴリー	項目	全体		性別				武道経験				武道種目			
		平均値	SD	男性群(95名)		女性群(41名)		有り群(25名)		無し群(108名)		柔道授業群(87名)		剣道授業群(35名)	
技能	基本動作、基本となる技の習得	2.98	0.89	3.00	0.83	3.00	1.00	2.92	1.06	3.02	0.84	3.02	0.85	2.83	0.98
	攻防の展開	2.83	1.00	2.81	0.95	2.95	1.09	2.80	1.17	2.83	0.96	2.90	1.00	2.80	1.02
態度	協力	3.12	0.89	3.08	0.85	3.27	0.92	3.24	0.86	3.08	0.88	3.16	0.87	3.00	0.94
	責任	3.23	0.78	3.22	0.73	3.34	0.79	3.28	0.66	3.22	0.79	3.31	0.70	3.06	0.94
	健康・安全	3.44	0.71	3.41	0.72	3.61	0.54	3.48	0.70	3.44	0.71	3.53	0.63	3.26	0.89
	愛好的態度	3.33	0.77	3.31	0.74	3.46	0.71	3.44	0.70	3.31	0.77	3.43	0.68	3.09	0.89 *
	伝統的な行動の仕方	3.32	0.75	3.29	0.73	3.46	0.71	3.40	0.69	3.30	0.76	3.39	0.69	3.17	0.89
知識	武道の特性	3.17	0.85	3.20	0.83	3.20	0.84	3.08	1.09	3.19	0.78	3.31	0.77	2.89	0.96 *
	武道の成り立ち	3.08	0.90	3.07	0.93	3.17	0.80	2.88	0.91	3.11	0.90	3.13	0.85	2.89	1.05
	技の名称や行い方	3.22	0.80	3.20	0.78	3.34	0.76	3.00	0.98	3.26	0.74	3.34	0.68	2.94	0.94 *
	伝統的な考え方	3.15	0.82	3.18	0.76	3.17	0.89	2.96	0.87	3.19	0.80	3.21	0.78	3.06	0.91
	その運動に関連して高まる体力	3.08	0.81	3.08	0.81	3.15	0.76	3.04	0.82	3.07	0.80	3.13	0.77	2.94	0.94
	試合の行い方	2.80	0.95	2.85	0.91	2.73	1.03	2.76	1.03	2.78	0.93	2.79	0.95	2.77	0.94
思考・判断	体の動かし方や運動の行い方に関する思考・判断	3.05	0.89	3.07	0.87	3.07	0.91	2.84	1.08	3.08	0.83	3.08	0.84	2.91	0.95
	運動実践につながる態度に関する思考・判断	3.18	0.79	3.21	0.76	3.20	0.81	3.04	0.87	3.20	0.77	3.24	0.73	2.94	0.94
体育の方向目標		3.11	0.84	3.07	0.88	3.22	0.76	3.16	0.78	3.08	0.85	3.16	0.81	2.94	0.84
		3.12	0.89	3.14	0.89	3.17	0.83	2.92	1.09	3.16	0.83	3.22	0.78	2.83	1.01

*p<0.05

言及が見られた。

- ・投げ技だと怪我のリスクがあるので寝技を取り組んでみたい
- ・まずは安全を第一に生徒の身になる、そして楽しめる授業をしたい
- ・武道をしっかり安全に行うために必要なことや意識していかなければならないことをまずは指導していきたい

Fig. 9は、出現単語について重要度を加味したスコアの高い単語を大きさで表したワードクラウドである。出現頻度は多くないが、「ICT」「礼儀作法」が高いスコアを示していた。

「ICT」については、以下のような記述が見られた。

- ・ICTを活用した授業
- ・ICTを取り入れて動作を撮影して客観的に自分の型が出来ているか確認できるようにして取り組んでみたい

「礼儀作法」については、直接記述されているもののほか、「礼法」「座礼」などの関連する記述も見られた。

- ・礼儀作法はしっかり学べるように取り組みたい
- ・礼儀作法の習得に尽力したい
- ・武道の所作であったり心得を教えたいと思っている

4. 考察

本研究では、武道必修化以降に中学校で武道授業を経験し、体育教員として武道授業を指導する立場になる保健体育科教員養成課程学生を対象に、自身が経験

した武道授業の授業条件や学習成果をどのように捉えているかを明らかにするために、回顧法による質問紙調査を実施した。本研究の回答者は、2023年度の大学2年生～4年生で、関ほか（2023）の研究による武道必修化後の回答者（2021年度の19歳～22歳）より2学年下となっていた。

なお、本研究は回顧法による調査方法のため、回答者には数年前を振り返っての回答を求めている。また、学んだ生徒の側からの回答のため自己評価による学習成果が客観的に習得されたものかどうかの確認はできない。そのため、記憶の曖昧さや不確かさが生じる可能性があることを念頭に置き考察する必要がある。

まず、本研究の回答者が経験した武道授業の授業条件は、男女別習で体育教員1名による授業形態が多く、施設や設備が「十分な広さと用具」と回答した割合は半数弱であった。授業内容は、「基本となる技まで」が最も多く、ゲームの要素を取り入れた学習活動があったとする回答は半数に満たない結果であったが、回答者の70%以上が授業の雰囲気は「明るかった」「やや明るかった」と回答していた。関ほか（2023）の武道必修化後の回答者と比較すると、武道授業の実施形態、指導者数、運動時間の確保、授業の雰囲気、指導方法の工夫については本研究でもほぼ同様の結果であった。施設や用具の状況については、関ほか（2023）では「十分な広さと用具」と回答した割合は32.4%であったのに対し、本研究では44.9%と高かった。一方、指導の段階については「基本となる技まで」と回答した割合は、関ほか（2023）では51.2%であったが、本研究では60.9%とやや高い傾向となっ

Table 5 出現単語（名詞）の上位

名詞	スコア	出現回数
授業	5.54	16
指導	16.15	14
武道	38.84	13
技	8.00	13
試合	2.43	12
生徒	9.65	11
柔道	27.94	10
怪我	4.52	10
安全	3.03	7
基本	0.90	7



Fig. 9 ワードクラウド

ていた。施設や用具については少しずつ整備が進められているものの、現行の学習指導要領に示されている「簡易な攻防を展開すること」は、本研究の結果からも授業での学習経験が少ない状況であることが窺える。武道授業の平均授業時間数が7.8時間（日本武道館，2021）という現状において、武道の本質的魅力をいかに深く味わわせるか課題は多いと言えよう。

次に、中学校武道授業において学習内容に関して身に付いたと感じた学習成果については、関ほか（2023）の研究では、学習成果のカテゴリー平均得点は2.44～2.67の範囲であるのに対し、本研究の回答者のカテゴリー平均得点は2.9～3.1と高い範囲となっていた。本研究の回答者は保健体育科教員養成課程学生であり、運動が得意であるという特性から自身の学習成果を肯定的に捉えていると考えられよう。しかしながら、項目別にみると、本研究においても試合の行い方や攻防の展開の項目の平均得点は低く、授業内容が「基本となる技まで」に留まっていたことを反映していると言えよう。また、本研究では、武道種目により学習成果の一部の項目（⑥愛好的態度，⑧武道の特性，⑩技の名称や行い方）に違いが見られ、これらの項目については剣道授業群よりも柔道授業群の項目平均得点有意に高かった。剣道では、防具や竹刀などの道具が多く扱いの難しさがあることが得点に影響を与えている可能性が推察される。

本研究の回答者が、実習生や教員など武道授業を教える立場になった場合に取り組みたいことについては、技ができる楽しさや喜び、簡単な攻防、安全に気を配ること、伝統的な考え方など、現行の学習指導要領の内容を踏まえた記述が多く得られた。回答者が、保健体育科教員養成課程での学びの中で学習指導要領を踏まえた考えが身に付いてきている様子が窺える。

今後求められる武道授業において、特に押さえておかなければならないのは、武道必修化の理由ともなった武道が武技、武術などから発生した我が国固有の文化であることを理解させること、さらに武道の本質的な課題と面白さを伝えることである。学習指導要領（文部科学省，2017）でも、1対1の対人状況下において、相手の動きに応じて基本動作や基本となる技を身に付け、技を用いて相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって勝敗を競い合い、互いに高め合う楽しさや喜びを味わうことができる運動であるとされている。例えば、剣道では剣道具を身に付けて相手を「打つ」⇔「そうさせない」という攻防の面白さを追求して取り組み、試し合う面白さを授業でいか

に経験させるかが本質的課題になる。しかし、現在の武道授業では、礼法や伝統的な行動の仕方（礼儀・礼節）、安全への配慮を伝えることが重視されがちであり、武道の本質的な面白さを伝える授業になっているかの検討は少ない。学習指導要領で示される「簡易な攻防」「攻防」の面白さが伝わる武道授業が今後期待されるであろう。

今後は、どのような授業条件や授業内容が武道授業の学習成果に影響を及ぼすのか、多角的なデータの集積と分析を通して、対人格闘技であるそれぞれの武道種目の特性およびおもしろさを捉えた教員養成について検討していく必要があるだろう。

付記

本研究は、2023年9月に開催された日本武道学会第56回大会において研究発表した内容に加筆修正したものである。

引用・参考文献

- 1) 林弘典・石川美久・生田秀和（2023）学習指導要領の改訂に向けた中学校・高校における柔道授業の検討. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 20, 19-26.
- 2) 平田佳弘・京林由季子（2016）中学校保健体育教員の武道授業実践に関する意識—岡山県における実態調査から—. 武道学研究, 49, p.119.
- 3) 平田佳弘・京林由季子・吉岡利貢 他（2018）中学校・高等学校教育実習（保健体育）の実習状況と実習生の意識. 環太平洋大学研究紀要, 12, 177-182.
- 4) 加藤優（2017）『高田4 原則』を実現する授業方策の一考察. 都留文科大学研究紀要, 86, 1-19.
- 5) 文部科学省（2008）中学校学習指導要領（平成29年告示），第2章第7節保健体育. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/hotai.htm（情報取得2023/12/1）
- 6) 文部科学省（2008）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編，第2章第2節 各分野の目標及び内容. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf（情報取得2023/12/1）
- 7) 文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成29年告示），第2章第7節保健体育<https://www>.

mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf (情報取得2023/12/1)

- 8) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 保健体育編. 第2章第2節 各分野の目標及び内容. https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_1.pdf (情報取得2023/12/1)
- 9) 日本武道館 (2021) 第6回 中学校武道必修化に関するアンケート調査 (令和元・2年度実施状況調査). https://www.nipponbudokan.or.jp/pdf/gakkobudo/budo-survey_202112.pdf (情報取得2023/12/1)
- 10) 関伸夫・川田裕次郎・中村充 (2023) 中学校武道授業の必修化前後における学習成果の変化. 体育学研究, 68, 409-423.
- 11) 全日本剣道連盟 (2009) 学校体育実技「武道」指導資料 中学校武道の必修化を踏まえた剣道授業の展開. 全日本剣道連盟.